2022年度

札幌日本大学中学校
入学選抜試験
【A日程（1月7日）】

国　　語

試験時間　60分

1．指示があるまで，問題冊子（さっし）を開いてはいけません。
2．答えは，解答用紙に記入してください。問題は，一～二までであります。
3．試験監督（かんとく）の先生の指示に従って，試験を開始してください。
4．試験の途中で，トイレに行きたくなったり，気分が悪くなったりした場合は，手をあげて試験監督の先生の指示を受けてください。
5．試験開始の指示があってから，解答用紙に「受験番号」「氏名」を記入してください。
6．解答用紙には，解答以外を記入しないでください。
7．試験が早く終わっても，周囲を見回したり，横を向いたりしてはいけません。試験監督の先生から注意を受けることがあります。
8．机の上には，筆記用具以外は置いてはいけません。風邪（かぜ）などにより，ティッシュペーパーを使用したい場合は，予（あらかじ）め試験監督の先生に申し出てください。

一

次の文章を読み、後の問に答えなさい。なお、設問の都合により本文を一部改変してあります。また、ぬき出しの問いや字数の指定のある問いは、句読点も一字に数えます。

私たちはこの世に誕生したときから声を出し、同時に多くの声を聞いて日々を過ごしています。誰にとっても一度も声を出さなかったとか、(テレビやラジオも含め)人の声をまったく聞かなかったという日はまずないのではないでしょうか。

人は生まれたその瞬間、はじめて吸い込んだ息を大きな産声にして、自らの存在を知らせます。そして親や周りの人に話しかけられる声を浴びて育ち、言葉をおぼえ、要求や思いを伝えます。声は人間にとってもっとも身近な*コミュニケーションツールであり、自分を表現するための*メディアです。私たちは生まれてから死ぬまで、声によって自分と人、社会を繋いで生きています。

では、①そんな「声」というものを、私たちは普段どれほど意識しているでしょうか。

自分の声、会話の相手の声、テレビやラジオから聞こえてくる声、バスや電車の車内アナウンス——。声は人のいるところ、いたるところにあります。あまりにありふれていて、空気みたいな存在です。なければ大変だけれど、あるのがあたりまえ。だからこそ、ほとんどの人はあまり意識しないのではないでしょうか。

私たちは人に何かを伝えようとするとき、話す内容を考えますよね。より魅力的に映るよう上手な話し方を習ったり、発音を明瞭にしたり声量を大きくするための*ヴォイス・トレーニングを受けたりする人もいるでしょう。しかし、会話はもとより、スピーチや*プレゼンテーションから政治家の演説にいたるまで、話すときの「声そのもの」がクローズアップされることはまずありません。

しかし、みなさんは人と話すときに、②こんな経験はありませんか？

相手はいかにも理路整然とaセイロンを話しているのに、なぜか心に届かない。よいことを言っているのに、なんとなく反発を感じる。逆に、内容的にはたいしたことを言っていないのになぜか惹かれてしまったり、反対の意見を持っていたのに、いつの間にか説得されてしまったりする。

自分が話し手である場合のことも、ちょっと思い出してみてください。

一生懸命に話しているのに相手にはうまく伝わらない。周到に準備したのにまともに聞いてもらえない。その一方で、

ちゃんと話せていなかったのにすんなりと通じたりもする。

私たちは日々、人と接してはこういうことを繰り返しているので、なぜそういうことが起こったのかなどとはあまり深く考えず、たまたまそうだったのだろうと思っています。しかし、人の感情が動くときには必ず理由があります。その大きな要因のひとつが、じつは「声」なのです。正確に言うと「声という音」です。

ある実験で、声の特徴が異なるA・Bの二人に同じ言葉を同じ[b]ソクドで話してもらい、*被験者にそれを聞いた印象を回答してもらいました。その結果、Aに対しては九〇パーセント超の人が「信頼できそう、リーダーになってほしい、友人になりたい」といった、良い印象を抱いたのに対して、Bはそのような票をほとんど獲得することができませんでした。

この実験結果が示すことは、人は声だけで、その人物に対してかなり明確に「好ましい・好ましくない」というイメージを持つということです。実験で、A・Bは否定的なことと肯定的なことの両方を話し、被験者はその二種類の言葉を聞いているのですが、否定的な内容のほうがAにより多くの「好ましい」票が集まりました。つまりAは、否定的なことを言っても好ましい印象を与えることができたのです。

会話でも演説でも、[c]メンミツなメモでも取らない限り、人はその内容を一割程度しか憶えていないと言われます。一方でこの実験が示すように、私たちは話し手の印象を、その「声」によって無意識にイメージングしています。もっと話を聞いていたいと思わせたり、逆にもういやだな、さっさと話が終わらないかなと感じさせたりするのも、話の内容だけではなく、声によるもの、声に含まれる音の要素による影響が大きいのだということが、近年の研究によって明らかになってきました。私たちの心は、時として語られた言葉よりも、声によって動かされているのです。

③なぜ声が、そのように人の心を動かすのでしょうか。

その秘密は、「聴覚と脳」にあります。

聴覚とは、音を受け取る器官である耳から入った音が、脳内で処理される一連の感覚のことをいいます。感覚というものは謎に満ちています。耳や目といった*受容器が刺激を受け取り、それを脳で処理した結果を感覚といいますが、私たちはそれによって自分を取り巻く世界を認識しているわけです。

視覚はかなり自覚的な感覚器官です。見たくなければ目を閉じればいいし、見たものは絵に描いたり写真に撮ったりして再現と確認ができる。一方では耳は閉じることができず、眠っているときにも、さらには*昏睡状態のときですら音を

受け取り続けます。人は閉じることができない耳から絶え間なく膨大な音を受け取っていて、それは録音によって再現はできるものの、脳が自覚した音の正確な再現や確認はできません。④聴覚は、視覚に比べるとはるかに無自覚的な器官なのです。

たとえば街に出たとき、どれほど多くの音が満ちているでしょうか。木々の葉擦れ、鳥のさえずり、雑踏の音、車のエンジン音やクラクション、人の話し声、商店街から流れてくる音楽やdセンデンの音など、いちいち自覚して聴いてはいませんよね。聞き流している音がほとんどです。しかし、聞き流していても、その音はすべて聴覚を通して脳に取り込まれています。

人の話を聞くときには、まず話されている内容を理解しようとしますよね。声は耳から大脳の*聴覚野を通って、言葉を理解する言語野という部分に送られ、言葉の内容を受け取ります。言語野というのは大脳の新皮質という、人間が人間として進化を遂げていく段階で新しくできた部分にあります。新皮質は理性、つまり知的領域を担っている場所だといえるでしょう。

しかし声の「内容」と同時に、私たちは声という「音そのもの」も同時に脳内に取り込んでいます。そしてこの「音という音」は新皮質だけでなく、大脳のもっとも深いところにある旧皮質を刺激するのです。旧皮質はその名のとおり、発生系統としては進化のごく初期の段階でできたもので、本能領域にあります。ここは危険をeサッチしたり、快・不快を理性と関係なく判断したりするところです。最新の研究では、音は脳のほぼ全領域に影響することがわかっています。

声という音は、新皮質と同時に旧皮質に滑り込み、「心地よい、悪い、好き、嫌い」といった本能的な感情を起こさせます。もちろん*無意識裡に、です。つまり、*顕在意識にも*潜在意識にも作用しているわけですね。

ここに声の影響力の秘密があります。言葉を無視して心の奥底に届き、私たちの感情を揺り動かしてしまう。それが声の知られざる、そして恐るべき力です。

（山﨑広子著『声のサイエンス　あの人の声は、なぜ心を揺さぶるのか』　ＮＨＫ出版）

【注】
＊コミュニケーションツール＝言葉や文字などで情報をやりとりする時の、手段・方法・道具。
＊メディア＝ここでは、手段・方法のこと。
＊ヴォイス・トレーニング＝発生の練習。

＊プレゼンテーション＝自分の計画や考えなどを、会議など多くの人の前で説明すること。
＊被験者＝実験の対象となる人。
＊受容器＝刺激を受けろる器官。
＊昏睡＝非常に深く眠りこんでいる状態。
＊聴覚野＝聴覚にかかわる刺激をつかさどる部分。
＊無意識裡に＝無意識のうちに。
＊顕在意識＝はっきりと自覚されている意識。
＊潜在意識＝自覚されないままに、行動や考え方に影響を与える意識。

問一　═══線部a～eのカタカナを漢字に直しなさい。ただし、大きくていねいに書くこと。

問二　次のア～オは本文に出てくる表現です。ア～オの――線部の中から一つだけはたらきの異なるものを選び、記号で答えなさい。

ア　私たちはこの世に誕生したときから声を出し、
イ　人は生まれたその瞬間、
ウ　はじめて吸い込んだ息を大きな産声にして、
エ　ほとんどの人はあまり意識しないのではないでしょうか。
オ　内容的にはたいしたことを言っていないのに

問三　――線部①「そんな『声』というもの」とありますが、「声」とはどのようなものですか。それを説明している一文を本文中からぬき出し、最初の五字を答えなさい。

問四　――線部②「こんな経験」とありますが、具体的にはどのような経験ですか。本文中から二箇所（かしょ）、それぞれ過不足なくぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問五　――線部③「なぜ声が、そのように人の心を動かすのでしょうか」について、次の各問いに答えなさい。

(1)「そのように人の心を動かす」とありますが、どのような心の動きが起きるのですか。実験の結果をふまえて、本文中から四十五字以上、五十字以内でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

(2)「なぜ声が、そのように人の心を動かすのでしょうか」とありますが、その理由を本文中の言葉を用いて五十字以内で説明しなさい。

問六　――線部④「聴覚は、視覚に比べるとはるかに無自覚な器官なのです」とありますが、どういうことですか。その説明として適切なものをすべて選び、記号で答えなさい。

ア　私たち人間は、視覚については、見た情報のうち認識したいものが本人の思い通りに選べるのに対し、聴覚については、聞いた情報はすべて認識されてしまう、ということ。

イ　私たち人間は、視覚については、目に入る情報の印象より内容を優先して物事を理解することができるが、聴覚については、内容より印象が優先されてしまう、ということ。

ウ　私たち人間は、視覚については、画像に残すことで見たものを再現できるのに対し、聴覚については、録音しておいても脳が自覚した音の正確な再現ができない、ということ。

エ　私たち人間は、視覚については、目に入ったすべてのものを確認し意識することができるが、聴覚については、自分が意識したものしか認識することができない、ということ。

オ　私たち人間は、視覚については、自分の意志で見るか見ないかを判断できるのに対し、聴覚については、自分の意志で聞くか聞かないかを決めることはできない、ということ。

カ　私たち人間は、視覚については、目に入ったものをことごとく意識してしまうが、聴覚については、耳で受け取った情報を聞き流し意識しないこともできる、ということ。

問七　この文章は、何について述べている文章ですか。本文中の言葉を用いて、十字前後で答えなさい。

二

次の文章を読み、後の問に答えなさい。なお、設問の都合により本文を一部改変してあります。また、ぬき出しの問いや字数の指定のある問いは、句読点も一字に数えます。

部活に行こうとしていた「ぼく」と同級生の糸井さんは、同じ部のマスミン先パイと猫田先生が廊下で話している内容を聞いてしまった。

糸井さんがいなくなり、どうしていいかわからないままのぼくに説明してくれたマスミン先パイは、あまりにいつもどおりの口調だった。

「お父さんの仕事の関係で、ホントは夏前にひっこすっていわれてたんだわ。けど、文化発表会まではっておねがいして、お父さんだけ先に行ってもらってるってわけ。十一月になったら転校する。」

なんてかえしたらいいのかわからなくて、上ばきのつま先に目をおとす。

マスミン先パイが、もうすぐいなくなる。

これまでいろいろとよくしてくれたマスミン先パイがいなくなるのはさびしいってぼく自身の気持ちもあったけど、それよりなにより糸井さんが心配だった。

すぐに糸井さんを追いかければよかった。

話し声がきこえたらしい、被服室から顔をだしたサンカク先パイにも、マスミン先パイは転校のことを説明する。

サンカク先パイはたっぷり五秒くらいかたまってから、「……マジ？」とつぶやいた。

「うん、マジ。」

「……マジか。」

サンカク先パイもそれなりにショックを受けているみたいだけど、もともと表情があまりうごかない人だし、さっきの糸井さんよりはずっとおちついている。

重たい空気でだまってしまったぼくたちに、「ごめん！」と猫田先生が頭をさげた。

「こんなところで、ぼくが転校の話なんかしたから……。」

「①もっと早く、みんなに話さなかったわたしがわるかったんです。」
そして、マスミン先パイはぼくとサンカク先パイに両手をあわせてあやまった。
「わたし、しんみりするの苦手でさ。ファッションショーやって、みんなで『楽しかったねー』っておわりにしたくて――。」
「でもわたしは、もっと早く、教えてほしかった。」
意外にも、すぐさま強い口調でかえしたのはサンカク先パイだった。
「……転校のことは、しょうがないけど。」
かくしごとをしていたぼくに「ムカつく」ってくりかえした*カイトの気持ちがいまならわかる。
友だちだから、仲間だからこそいってほしいことがある。
「②ごめん……。」
さっきまでの口調がウソみたいにちっちゃな声であやまり、目もとをうるませたマスミン先パイの頭を、サンカク先パイがやさしくなでる。
「……いいにっくかったのも、わかる。」
その言葉に、マスミン先パイは手の甲で目もとをぬぐって「ありがとう。ホントにごめん」とかえした。

つぎの日、糸井さんは学校を休んだ。
「わたしのせいだよね……。」
放課後、被服室でマスミン先パイはうなだれて机につっぷした。
「……マスミがおちこんでも、しょうがない。」
サンカク先パイのボソボソした言葉にぼくもうなずく。
「でも、文化発表会、来週なのに……。」
糸井さんのフェルトボールドレスは九割がた完成してたけど、最後のしあげがまだだった。
それにこんな状態じゃ、『ファッションショーを「楽しかったねー」っておわりにできるわけがない。
ここにくるまでずっとまよってたけど、③先パイたちを見てぼくの心は決まった。

「糸井さんの住所、知ってますか？」

そうしてぼくはひとり、学校をでるとその足で糸井さんの家にむかった。

きのう、おちこんだマスミン先パイをサンカク先パイがなぐさめているのを見て、ふたりは部活仲間であると同時に、同じ学年の友だちでもあるんだなって思った。

糸井さんと同じ一年生のぼくだからできることも、あるかもしれない。

『糸井』って表札がある二階建ての家をなんとか見つけ、インターフォンを押すと、とたんに心臓がバクバクしはじめる。

五秒、十秒と長すぎるくらいの沈黙のあと。

『はい』って声がしてぼくは背すじをしゃんとし、前のめりになって声をだした。

「ち、千城中の、針宮優人ともうします！莉香さんと同じクラスでありまして、ひひひ被服部でございます！」

ぷつっとインターフォンが切れて、なんでこんなヘンな言葉づかいにって頭をかかえていたら。

「ハリくん、おもしろすぎ。」

糸井さんが笑いながら玄関のドアをあけてくれて、緊張の糸がたちまちゆるんだ。

長い髪は三つ編みおさげにしないでおろしてて、見慣れないジャージ姿。そして、④メガネの奥のまぶたはまっすぐ見るのがためらわれるくらいぼってりしている。

糸井さんは「どうぞ」ってぼくを家のなかに通した。

糸井さんのお母さんはパートの仕事でいないらしい。ぼくをリビングに通すと、糸井さんはグラスに麦茶をいれてだしてくれた。

うちよりもちょっとすわり心地のかたい革のソファにすわり、Aおしりをもぞもぞさせていると、糸井さんはローテーブルをはさんでぼくのむかい、床の上にペタリとすわる。

「きのう、ごめんね。」

いつもの元気はどこへやら、しおらしくあやまると糸井さんはうつむいた。

「ぼくもきいておどろいたし、しょうがない、と思う。」
会話がつづかなくて、グラスの麦茶をちまちまと飲む。
ぼくにもなにかできるんじゃないかって気持ちだけでここまできちゃったけど、なにをどうしたらいいのかわからない。ノープランってヤツだ。
「……糸井さんは、マスミン先パイのこと、好きなんだね。」
とにかく何か話そうと思ってあまりにいまさらすぎることをいった気がするけど、糸井さんは何度も何度も強くうなずいた。
「好き。超好き。」
糸井さんは[B]気持ちをしぼりだすみたいにいうと、両ひざをかかえて話しだす。
「……あたし、超絶不器用だし、ハリくんは知ってると思うけど、裁縫なんて得意じゃないんだよ。どっちかっていうと好きじゃなかったし。」
四月の入学式の日のこと。学校に到着して早々、糸井さんは昇降口でころんでしまい、制服のスカートをひっかけてやぶいてしまったのだという。
「そのとき、マスミン先パイが通りがかってね、スカート縫ってくれたの。」
背が高くてカッコいい見た目からは想像できないくらい、針と糸を使うマスミン先パイの手つきはとってもていねいで繊細で。
「なんてキレイなんだろうって思った。こんな先パイみたいになりたいって思った。だから被服部に入ったのに……。」
うつむいていた糸井さんの目からあふれた涙が丸いレンズにボタボタおちて、糸井さんはメガネを外した。メガネのない目は予想外に大きく、ぬれた長いまつげは蛍光灯の明かりでキラキラする。
糸井さんが、こんな顔をするなんて知らなかった。
指先を針で刺したように、胸の奥がチクリと痛む。
いつも明るく元気で前向きで、そんな糸井さんしか、ぼくは見てなかったんだって痛感させられた。
「マスミン先パイがいないんだったら、」

嗚咽をもらしながら、糸井さんは言葉をつづける。
「もう意味ないし――。」
思わず麦茶のグラスをおいて、ぼくは立ちあがった。
ぼくは何も知らなかった。
知らなかったけど、⑤でもこれだけはいわずにはいられない。
「意味ないの？」
ぼくの言葉に糸井さんは顔をあげた。
「マスミン先パイがいなくなったら、糸井さんが被服部にいる意味、なくなるの？」
糸井さんは手の甲で目もとをこすり、メガネをかけなおすとぼくを見あげる。
「たしかに、被服部に入ったのはマスミン先パイにあこがれてだったのかもしれないけど……糸井さんにとって、被服部にいる意味ってそれしかないの？」
「それは――。」
「被服部にくるようにさそってくれて、勝手に仲間にされて、ヒドいことといったのに家までできてくれて……。」
あのとき、ぼくは。
「うれしかった。うれしかったのに！　そういうのぜんぶ、意味なかったってこと？」
「そ、そんなことない！　ちがう、そうじゃなくてっ……。」
糸井さんも立ちあがって、テーブルをはさんでむかいあった。
じりじりとした沈黙のなか、そのまま無言で見つめあう。
「……ごめん。」
「あたしこそ……。」
あやまりあって、どちらともなくふたたびすわる。気はずかしい空気になっちゃって、そろって麦茶のグラスに手をのばす。
なんだかとっても苦くてしょっぱい気持ちだった。
糸井さんや先パイたちのためになにかできないか、ぼくは必死に考える。

「……転校しちゃうのは、ぼくらにもマスミン先パイにも、どうにもできない、と思う。」
糸井さんはまた目もとをうるませ、そしてぼくは自分自身の言葉にあらためて思いしらされる。
中学生のぼくらには、どうあがいてもできないことがある。
だけど。
「マスミン先パイがファッションショーを楽しくおわらせたいっていってたのは、みんなでどうにかできるんじゃないかな。」
なにもできないわけじゃない。
できることだってある。
みんなでやれること。
ぼくにやれること。
糸井さんはじっとぼくを見つめ、やがて口をひらいた。
「なにか、できるかな？」
ぼくは窓に、部屋の外に目をやった。のぞく空はすでに夕方の色をしてる。
「……ぼくさ、」
「うん。」
「ファッションショー、でる。」

翌日、元気に登校してきた糸井さんは教室につくなり、マスミン先パイのクラスまでぼくをつれていった。
「ひとりで行けばいいのに。」
「ひとりじゃうまくいえないかもしれないから、ついてきてほしいの！」
いるだけで糸井さんの助けになるなら、それはわるくないかって気がする。
そうして二年二組に到着し、呼びだしたマスミン先パイがでてくると、糸井さんは三つ編みおさげをふりまわすようにして「このあいだは、ごめんなさい！」とあやまった。
そして、宣言する。

「ファッションショー、みんなで絶対に成功させましょう！」
ぼくたちにできることは少ない。
けど、ぼくたちにしかできないこともある。
⑥マスミン先パイはあっけにとられた顔になり、ぼくを見て、それから糸井さんに目をもどして笑った。
「⑦ありがとう！」

（神戸遥真著『ぼくのまつり縫い　手芸男子は好きっていえない』偕成社）

【注】＊カイト＝針宮優人の同級生。

問一　═══線部×の「れ」と同じ意味のものを、次の中の═══線部の「れ」から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　放課後、被服部でマスミン先パイはうなだれて机につっぷした。
イ　うつむいていた糸井さんの目からあふれた涙が丸いレンズにボタボタおちて、
ウ　「被服室にくるようにさそってくれて、勝手に仲間にされて、ヒドいことといったのに家まできてくれて……。」
エ　「被服室にくるようにさそってくれて、勝手に仲間にされて、ヒドいことといったのに家まできてくれて……。」
オ　マスミン先パイのクラスまでぼくをつれていった。

問二　〰〰線部A「おしりをもぞもぞさせている」、〰〰線部B「気持ちをしぼりだすみたいにいう」とありますが、この表現はどのような様子を表したものですか。その説明として最も適切なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A「おしりをもぞもぞさせている」

ア　この場をとりつくろえるような言葉を言おうと、必死な様子
イ　対応の仕方がわからないため余裕がなく、落ち着かない様子
ウ　意図せずに二人きりになってしまい、舞い上がっている様子

エ　緊張によりおしりがかゆくなってしまい、我慢している様子
オ　ソファのすわり心地が悪くて、身体がかたくなっている様子

B「気持ちをしぼりだすみたいにいう」
ア　自分の今の気持ちを、少ないながらも精一杯の言葉にして、一生懸命に述べる様子
イ　自分の気持ちをうまく表現することができず、たどたどしい口調で述べる様子
ウ　言葉数は少ないが、自分の思いを理解してもらおうと、途切れ途切れに述べる様子
エ　自分の中にある揺るがない思いを、かくすことなく強くはっきりと述べる様子
オ　今まで誰にも伝えたことのない思いを、ためらいながらもわずかに述べる様子

問三　――線部①「もっと早く、みんなに話さなかったわたしがわるかったんです」とありますが、ここまでの内容にもとづいて、「マスミン先パイの転校」を知った後の糸井さんの反応と「ぼく」の反応のちがいを、七十字以内で説明しなさい。

問四　――線部②「ごめん……」とありますが、この言葉を発するまでのマスミン先パイの心情は、どのように変化しましたか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　転校の件は誰にも言わず、ひっそりと被服部を去ろうと決心していた。しかし、自分が転校のことを話さなかったせいで糸井さんやサンカク先パイを激しく動揺させてしまい、部内にもめごとが起きたので、どうして良いかわからず困惑し、悩みを一人でかかえきれなくなっている。
イ　楽しい気持ちのまま去ろうという自分の思いを、部活の仲間はわかってくれると期待していた。しかし、糸井さんが出ていったりサンカク先パイが強い口調で言葉をかえしたりする様子で、仲間から反感を買ってしまったと気づき、これ以上責められたらどうしようとおびえている。
ウ　自分が被服部を去っても、部活は問題なく続いていくだろうと楽観していた。しかし、猫田先生が転校の件を話してしまい、それを聞いた糸井さんがいなくなったので、下級生に対する自分の思いやりが足りなかったことを後悔し、自分の非力さを感じて、やりきれなくなっている。

エ　転校の件はかくし、一人で楽しい思い出を作ろうと思っていた。だが、転校のことをかくすのはわがままだと、普段は穏やかなサンカク先パイから厳しい指摘を受け、自分の生き方や考え方に自身を持てなくなり、つらいのとみじめなのとで、どうして良いかわからなくなっている。

オ　部活の仲間には転校の件を言わず、楽しい思い出と共に去ろうと、心の整理をつけていた。しかし、同じ部活の仲間に転校の件を話さないのは納得できないというサンカク先パイの本音を聞いて、かくしごとをしていたやましさ、申し訳なさ、いたたまれなさがこみ上げてきている。

問五　――線部③「先パイたちを見てぼくの心は決まった」とありますが、このときの「ぼく」についての説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　サンカク先パイになぐさめられながら涙ぐんでいるマスミン先パイの様子を見て、普段から不器用で涙もろい糸井さんも同じように落ちこんでいるにちがいないと思い、同学年の自分が糸井さんに会いに行って元気づけようと思った。

イ　糸井さんの欠席を「わたしのせい」と考えて落ちこんでいるマスミン先パイの様子を見て、なんとか明るい気持ちになってもらいたいと思い、糸井さんの家へ行って、明日は学校に来て部活に参加するように説得してみようと思った。

ウ　落ちこんだマスミン先パイをサンカク先パイがなぐさめている様子を見て、被服部の仲間であり同学年の友人でもある自分が糸井さんに会いに行き、今の状況を少しでも良い方向に向けることができるよう、最善を尽くしてみようと思った。

エ　サンカク先パイがマスミン先パイに強い口調で本音を伝えた様子を見て、同じ学年の仲間であることの友情を感じ、自分も同学年であり被服部の仲間でもある糸井さんに会いに行き、時には厳しい態度で接しなければならないと思った。

オ　心配事はありながらも本音を伝え合うことで絆を強めた先パイたちの様子を見て、同学年で部活仲間であることの友情の深さに感動し、自分も糸井さんに会いに行き、被服部や糸井さんに対する正直な気持ちを打ち明けたいと思った。

問六　――線部④「メガネの奥のまぶたはまっすぐ見るのがためらわれるくらいぼってりしている」とありますが、このようになったのはなぜですか。その理由を三十五字以内で説明しなさい。

問七　――線部⑤「でもこれだけはいわずにはいられない」とありますが、「これ」の内容の説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　同じ被服部の仲間だというのに、糸井さんがマスミン先パイにあこがれるばかりで、「ぼく」など全く眼中にないという態度をとるのは、糸井さんに好意を抱いている「ぼく」にとってがまんできないくらいにくやしいことなのだ、ということ。

イ　糸井さんが悲しんでもマスミン先パイの転校は変わらないのだから、くよくよするのはやめて、「ファッションショーをやって、みんなで『楽しかったー』っておわりにしたい」というマスミン先パイの希望にそって努力するべきではないのか、ということ。

ウ　今までの「ぼく」は、明るく元気で前向きな糸井さんしか見ていなかったが、今の「ぼく」はマスミン先パイの転校を知って悲しみ思い悩んでいる糸井さんにしっかりと向き合って、部活の仲間として支えていきたいと思っている、ということ。

エ　裁縫が得意ではない糸井さんが被服部で活動を続ける意味は、やぶいてしまったスカートを見事な手つきで縫って直してくれたマスミン先パイにあこがれ、その先パイといっしょにいられることだったのかと、やっと理解できた、ということ。

オ　糸井さんは、マスミン先パイの存在だけを部活を続ける理由にしているが、「ぼく」を被服部にさそい、その後も気にかけてくれた糸井さんを、同じ部活の大切な仲間だと考えている「ぼく」の存在も、部活を続ける理由であってほしい、ということ。

問八　――線部⑥「マスミン先パイはあっけにとられた顔になり」とありますが、マスミン先パイがこのような表情になったのは、どのようなことがあったからですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　入学式の日にスカートを直してあげた時から糸井さんを気にかけていたのに、糸井さんは欠席したり一転して謝ったりと、自分勝手な行動をとったから。

イ　自分の転校の話がきっかけで糸井さんは欠席したのに、その糸井さんがいきなり謝罪しに来ただけでなく、文化発表会へのやる気まで見せたから。

ウ　糸井さんが理由もなしに学校を欠席したので文化発表会がどうなるかと不安になったが、糸井さんは何事もなかったかのように自分の前に現れたから。

エ　自分が転校を伝えなかったせいで糸井さんが傷ついたのは確実なのに、糸井さんは自分が傷ついたことを誰にも悟られないようにふるまったから。

オ　自分のわがままのせいで糸井さんが学校を休んだのに、その糸井さんは自分以上にわがままな行動をとって、周囲の人に迷惑をかけていたから。

問九　――線部⑦「ありがとう！」とありますが、マスミン先パイはどのようなことに対して感謝しているのですか。次の中から適切なものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分のせいでぎすぎすした関係になってしまった糸井さんと「ぼく」が、自分を安心させようと仲直りしてくれたこと。

イ　「ぼく」が、落ちこんでいた糸井さんに同じ一年生として働きかけて、糸井さんの気持ちを前向きに変えてくれたこと。

ウ　糸井さんが、部屋を飛び出してしまったという自分勝手な行動を後悔して、自分にきちんとあやまりにきてくれたこと。

エ　「ぼく」が、ひとりでは謝罪と決意をうまくいえないという糸井さんを助けて、自分の教室までついてきてくれたこと。

オ　「ぼく」と糸井さんが、転校までの期間はできるだけいっしょにいようとして、朝一番に自分の教室まできてくれたこと。

カ　気を取り直した糸井さんが、皆で協力して文化発表会でのファッションショーを成功させようと決意してくれたこと。